

交流

〈大会発表要旨〉

◆伊藤さとみ・馮日珍・曹泰和 お茶の水女子大学「基礎中国語テキスト」について お茶の水女子大学では、平成二十五年四月より、伊藤さとみ、馮日珍、曹泰和の三人が中心となり、「中国語科教育法Ⅰ／Ⅱ」「中国語教育実践方法論（基礎／応用）」などの中国語科教員免許の授業を通して、基礎中国語の授業向けのテキストの編集、及び対応するウェブを使った復習用教材の開発を始めた。これらの教材は、文法事項の数をHSK二級相当に抑える一方で、補充単語を付した会話練習を重要文法事項に付加することにより、文法理解の徹底と単語力の強化を図り、数・種類ともに豊富な聴解問題や絵を見て作文する問題の導入と合わせて、中国語によるコミュニケーション能力の全般的な向上を目指している。本発表では、その作成の過程、教材の特徴、授業に使用した効果について紹介した。

◆宮尾正樹 書く行為、読む行為 阿城の『遍地風流』（一九九九）には、七〇年代に挿隊していた頃から八〇年代にかけて書かれた散文や習作が収められているが、その中には、淡々と豆腐の作り方を説明するような、それだけを作品、文集、作者から切り離して見れば、およそ文学的とは言えない記述が見られる。にも関わらず、そこに文学を感じてしまう。そのあたりのことを、文学批評における文学定義をおさらいし、この作品のこれまでの読まれ方も参照しながら考えてみた。結局は陳思和の「潜在写作」、戴錦華が八〇年代の中国文学について使った「在場的欠席者」をやや恣意的に援用して、阿城の文章の中に文革の記憶を求め、てしまう自分という読者を発見したことになる。

〈例会発表要旨〉

◆森田さくら 敦煌写本S.836「葉浄能詩」について—説話の構造を巡って 唐末五代、道教関係者の手により成立した「葉浄能詩」は、敦煌写本のS.836だ。一点のみが現存している。「葉浄能

詩」は「符」と呼ばれるおふだを駆使して難題を解決する一人の道士・葉浄能の姿が描かれ、特に玄宗との月旅行のエピソードは元代の『天寶遺事諸宮調』や雜劇『唐明皇遊月宮』等に影響を与えたとされる。本発表において「葉浄能詩」の構造を考察し、「葉浄能詩」がどのような性質を持つ作品であったのかを検討した。まず作品の内容から、作品を序章部分、十一の説話からなる説話部分、終章部分という大きく三つの部分に分け、続いて十一の説話部分について時系列、繰り返し、話題の規模という三点に注目した。結果として、説話部分も作品全体の構造と同様に三部構成であり、各説話は一方方向にしか進めないことが分かった。このような工夫は、聴衆を飽きさせないための作者の演出として考えられる。

◆石井洋美 葉聖陶と韓寒の心理表現の比較—方向補語「上」の用法に着目して— 80后を代表する作家であると言われる韓寒と、文字、言葉、文法、修辞のいずれにおいても標準化、規範化することに努めながら独自の風格を生み出した

と言われる五四作家、葉聖陶の小説に使用された方向補語を含む表現を拾い出して比較してみると、韓寒が多用している「爱上」を葉聖陶はひとつも使用していないことに気づく。この相違をきっかけに方向補語「上」に着目し、二作家の心理表現の相違を見ていった。

韓寒とその同時代の作家には「爱上」、「喜欢上」のような「心理動詞＋上」による直接的な心理表現が多く見られるが、そこからは粘度の低い、行為化された心理が感じられる。それに対して、葉聖陶とその同時代の作家は「動作動詞＋上」を用い、「考えが意識に上る」、「感情が心を覆う」のような言い方で心理を表現し、却って生き生きとした心情の動き、粘度の高い想いが感じられる。

方向補語「上」による心理表現の形式と内容の相違を通じて、作家と作家の属する時代の特徴の一端を知る試みを行った。

◆舟部淑子 中国伝統演劇を鑑賞して——崑曲を中心に 二〇一四年度在外研修での中国伝統演劇鑑賞の体験を報告し

た。まず、一年間の観劇の劇種と回数、上海・北京・杭州・南京・蘇州の劇場の概要を紹介。次に、崑曲のユネスコ無形文化遺産登録と、それを機に活発化した各種の取り組みについて述べた。特に、政府以外の社会・地区・民間の資金における継承と保護の活動、大学における崑曲伝承のカリキュラム、曲社の活動を紹介した。続いて、現地で撮影した写真をもとに、劇場と上演の紹介をした。劇場を、古戲台・中規模劇場・大劇場・その他の四種に分け、実際の観劇体験から、劇場によって異なる上演の形態を具体的にみていった。例えば江蘇省演芸集団崑劇院は、南京博物院老茶館・蘭苑劇場・紫金大戲院等、規模の異なる劇場を有機的に活用した各種の上演を行い、新しい観客の獲得にも効果をあげている成功例といえる。

◆横田むつみ 魚玄機の詩に関する一考察——詩作の原点と創造——嫉妬により侍婢を殺し、若くして刑死したと伝えられている女道士魚玄機の詩は約五十首現存している。妓女や女道士は宴席や道観

で士大夫と出会い詩を介しての交流をして、詩の応酬をしている。そこには恋愛も成立し、自らの現実の恋愛体験に基づいた募る恋情を詩という形式によって、自らの言葉で表白するようになる。晩唐期を生きた女道士の魚玄機もそのひとりであるが、このような恋の詩ばかりではない。自らの人生を深く見詰めて懸命に生きようとする姿や日々詩作に励む姿も窺える。男性であったなら仕官のためや士大夫の教養として考えられていた詩を女道士であった魚玄機はどのように捉えて、どのように詠んでいるのか。魚玄機にとって詩を詠むということはどういうことであったのか。そこから見えてくる魚玄機の詩作の原点と創造について、彼女が詠んだ種々の詩から考察を試みた。

◆戸沼市子 介詞「为」「为了」「为着」の意味について この三語は何らかの動作行為や状況を招く「きっかけ」、つまり「動機」を提示する介詞であり、いずれも「〜のために」の意をコアとするが、この三語を使い分けた表現の意味の違いは何か。つまり表現者がこの介詞の目的

語である対象をどう捉えて表現しているのかを、表現者の「視点の移動」、及び「爲」が本来有していた動詞性（「帮助（卫护）」の「活性化」という点から考えてみた。文法化を経て機能語と化した「爲」の視点は、典型的には「为人民服务」のように、いわば俯瞰的に対象を捉える表現であり、対する「爲了」の視点は、ある特定の対象の上に移動し、それを焦点化する（＋了）。焦点化による主観の働きの動詞性の活性化を呼び「爲のため」にこそ」を表す。「爲着」の視点は表現者の意識下に常在する（＋着）庇護、願望、記憶等々の上に移動し、動詞性の活性化を促し「かくあれかし」そうあってほしいがために」を表す。三語の使い分けは、コアの意味からより主観的実感的意味への具象化の反映と考える。

◆朱珊 張愛玲の作品における「理想的な女性」について 一九四三年にデビューした張愛玲は人間の利己的で複雑な本性を表現し、人間性と欲望の間で迷走する人物を描いた。しかし、「阿小」（一九四四年）、「顧曼楨」（一九五〇年）

と「小艾」（一九五一年）の三人の女性登場人物については、張は一般的に認識される様々な美德を兼ね備える女性、いわゆる「理想的な女性」として描いた。今回の発表では、陰湿な人物を描くのが得意な張愛玲が「理想的な女性」を創作した背景と特徴及び理由を考察した。

一九四四年の張愛玲は金銭的にも精神的にも余裕があるからこそ、一貫して、社会制度に対して反抗せず、立派な母親である「阿小」を描いた。「曼楨」と「小艾」について、人物設定は単に「良い人」である。その人物の特徴や、時代背景及び何十年も後に結末を書き換えたという作家本人の態度を踏まえ、張愛玲の文学創作に対する考えや、社会から与えられた影響も窺うことができる。

◆伊藤美重子・馮日珍・曹泰和・宮尾正樹 北京の空は（少し）青かった——二〇一五年中国語学短期研修実施報告 二〇一五年九月に、大学主催のものとして初めて、中国語の短期研修を行った。本発表はその簡単な報告である。詳細は、報告書 (<http://hdl.handle.net/10083/58206>) を参照していただくとして、発表では実施までの経緯、研修日程、授業その他の活動の紹介、研修の評価と今後の課題について述べた。二週間という短期間に設定して、今後より長期の研修や留学をするための「お試し期間」という位置づけにしたこと、企業（キヤノン）見学を組み込んだことが本研修の大きな特色であった。関係者の努力と参加学生の熱意によって、研修は成功裏に終わり、帰国後のレポート、アンケート等から判断して、中国語力の向上もさることながら、学習の動機付けやキャリア意識啓発の点で大きな効果を生むことができた。

◆譚昕 語篇衔接视角下的汉日零形回指对比——基于两篇小说的分析？ 许多先行研究认为汉语零形回指的使用远远不及日语，且汉语零形回指多只能用于小句间、很少跨句、跨段。本报告通过对中文小说《倾城之恋》及其日文翻译版、和日语小说《饲养》及其汉语翻译版的语料考察，得出了汉语零形回指的使用其实并不少于日语的结论。并同时对比汉日三种回指

形式使用上の異同点を考察。

考察資料時、本報告在划分小说中各个场面所出场的人数的基础上、通过统计零形回指及非零形回指的实际使用状况来进行了汉日对比分析。现将考察分析的结果、总结如下・①在内容明了不易引发歧义の場合、汉语更常使用零形回指、且完全可以跨句；②影响日语零形回指使用的因素、主要是其句子的内部构造；③比起日语、第三人称代词在汉语中更兼具关联词的功能、且第三人称代词的使用、能达到反映使用者主观意识的效果。④应针对汉语回指使用的特征来处理日汉回指的互换问题。

◆ 迫田博子 葉石濤と『台湾男子簡阿洵』——歴史を記憶するということと 第二次世界大戦終了後の台湾では、一九四七年に二・二八事件が起き、それ以降も、国民党政府一党独裁による強権政治の支配のもとで、不穏な時代が約四十年以上に及んだ。長らく、この時期に起きた出来事について明言することはタブー視され、台湾の言語空間で語られることは皆無に等しかった。一九八七年、

戒厳令が解除され、ようやく多くの記録書や回想録が刊行されるようになった。

葉石濤の『台湾男子簡阿洵』は、まさにこの年代にスポットをあてた作品であり、物語の内容は作者の実体験がベースとなつている。葉は、自身が遭遇した過酷な試練を創作の源泉としながら、封印してきた記憶の再構築を試みた。本発表では、先行研究などを簡単に紹介した上で、作中の具体的な内容について考察した。なかんずく以下の三点に注目し、明らかにしようとした。①国家と個人の命運の関わり②作中において単に事件を登場させるというのではなく、それをいかに描いたのか。③台湾の一般知識人が困難な時代と対峙した生き方とはいかなるものか。
(博士論文要旨)

2章では「也」などの意味指向副詞と疑問文の焦点の共起について説明した。疑問文の中でも同じく命題の是非を尋ねる諾否疑問文と正反疑問文の焦点の特徴を取り上げ、副詞との共起制限を考察した。

3章では「已经」、「马上」のようなアスペクト副詞と「将然のアスペクト」の「快要了」、「就要了」との共起状況について考察を行った。

4章ではモダリテイの意味を表す副詞「太」と「好」とモダリテイを表す助動詞「想」と「愿意」の共起状況の違いについて分析を行った。

本論文では副詞が焦点、アスペクト、モダリテイに与える共起制限について考察を行い、各章において副詞と焦点、アスペクト、モダリテイの関係、また副詞がこれらの概念に与える影響を観察することにより、副詞が焦点、アスペクト、モダリテイにおいてどのような位置にあるかを明らかにした。

◆ 鄭月子 文学史上における阮籍「詠懐詩」の位置 本論文は、受容のあり方

に視点をすえ、阮籍「詠懐詩」がどのよう
に受容され、そして後世の文学にどの
ような影響をもたらしたのかについて論
じるものである。二部構成である。第一
部は、「阮籍「詠懐詩」にみる時間の特質」、
「阮籍「詠懐詩」にみる空間の特質
(一)」、第三章「阮籍「詠懐詩」にみる空
間の特質(二)」の三章からなる。表現に現
われた時間・空間意識に注視し、「詠懐
詩」が「乱世」を生きる阮籍の実感を詠
み込んだ作品であると読者たちによって
受け止められる所以を考察したものであ
る。第二部は、「詠懐」と「言志」、「六
朝期における阮籍「詠懐詩」の受容」の
二章からなる。ここでは、受容の過程に
おいて阮籍詩が自己の内面を表出する文
学として展開していったことを論じた。

阮籍「詠懐詩」の有する個性がやがて
一つの詩作スタイルとして定着し、『文
選』に「詠懐」という部立てが立てられ
たように、文学に新たな可能性を加えた
のである。

◆天神裕子 半山、家林海音の主婦像
—台湾と北京・日本を漂泊した家庭 本

稿は、「半山」作家林海音の散文に描か
れた主婦像を分析し、それが一九五〇年
代の台湾で発信された意味について考察
するものである。五〇年代の台湾文壇は
国民党主導の文芸政策のもと、大陸から
渡った外省人作家の独壇場となった。女
性文芸の面でも、外省人の女性作家が日
本時代の作家に代わり次々と誕生し、女
性や家庭に関する散文を新聞の文芸欄な
どに多数発表していく。これら遷台女性
作家のうち、林海音は唯一「半山」—日
本の植民地時代に台湾から大陸へ移住し、
光復後に戻ってきた人—という、他と異
なる特殊なプロフィールをもっていた。
林の当時の散文には、その分身とみられ
る「自己肯定感の強い近代主婦」が度々
出現するが、本稿はそうした主婦像と「半
山」アイデンティティとの繋がりに着目
する。円満で幸せな家庭をもつ、多忙で
充実した主婦像、それを描くことは林海
音にとつて、台湾における自己を確立す
るための、一つの有効な手段であった。

◆范文玲 郁達夫小説に見られる西洋
への憧憬—女性表象を中心に 郁達夫
(一八九六—一九四五)は文学でもつて
中国の近代化—西洋化を先導した五四時
期を代表する文学者のひとりである。そ
の文学作品には、西洋の思想や文学から
の顕著な影響が認められ、作者の西洋へ
の憧憬を垣間見ることができるとされる。
それらの影響を紐解くことは郁達夫文学の
みならず、中国近代文学の発展を理解す
る上でも重要なことである。本論文では、
小説のテクスト中の西洋的要素を含んだ
語彙やセンテンスを抽出・分析し、そこ
に浮かび上がった意味を作家の経歴や社
会的背景と結合させて考察を行った。論
文の構成は以下の通りである。序章・第
一章『沈淪』に見る郁達夫の西洋への
憧憬・第二章「郁達夫小説における外
国語表現について」・第三章「女性表象
に見る西洋への憧憬」・第四章「郁達夫
小説における女性の身体描写の特色—創
造社作家群と比較して」・第五章「郁達
夫小説における母親像」・終章。本論文
は、郁達夫がいかに西洋文学・西洋思想
から影響を受け、それを自身の作品に反
映させて中国の新文学をリードしようと

していたかを、より立体的に映し出した。
(修士論文要旨)

◆小島良佳 九〇後女性文学研究——
張曉晗を中心とする二世代間の女性文
学比較—— 中国において、「九〇後」

は九〇年代生まれの世代を指し、また
「九〇後」文学はその世代の作家による
文学のことである。

「九〇後」の女性作家が大勢いる中で、
ひと際目立つ存在となるのは、張曉晗で
ある。彼女の小説の中には類を見ない表
現方法や修辭の技巧が隠されている。ま
た、他の「九〇後」の女性作家の作品と
比較することによって、他の「九〇後」
の女性作家には見られない成熟は主題選
択から明白になった。また、「八〇後」
を代表する女性作家、張曉然の作品にお
ける「反抗的」で、「破滅」した悲觀的
な内容とは対照的で、張曉晗の小説には
「若さ」や「希望」などの前向きな感情
が込められている。また、張曉晗の作品
は、手法として「意識の流れ」を用い、
構成において「二重構造」を使うなど、
バラエティに富んだ描き方をしている。

張曉晗の「個性」や作品の「魅力」が
より鮮明になり、張が「九〇後」の女性
作家において特別な存在であることは明
らかとなった。

◆角祥衣 後漢における情賦の発展と
「洛神賦」の成立について 曹植「洛神
賦」に繋がる後漢の情賦の発展状況を論
じ、宋玉「神女賦」等の他の賦と比較し
て「洛神賦」の特質を浮かび上がらせた。

「洛神賦」の先行研究は、作品が成立し
た背景や、詠じられた女性が誰であるか
ということ論じたものがほとんどであ
るが、本論では従来の情賦と「洛神賦」
の関連性に着目した。従来の情賦は、形
骸化していたものの諷諫の賦という形を
取っており、女性を慕うも思うようにい
かず、最後には心を入れ替えるという展
開であり、決まりきった型と化していた。
時代が進むにつれて情賦の語が飾られる
ようになってきたが、建安期に至っても諷諫
の語があり、内容に変化はなかった。し
かし同時期に作られた「洛神賦」は、男
性が女性を慕うというストーリーを描く
ことに終始しており、諷諫の語は無い。

「洛神賦」は、宋玉「神女賦」に基づき
ながらも伝統が破られており、ストー
リーが重視されている賦なのである。

◆山崎美奈子 中国語会話文の考察と
語用論の観点から 本論文は現代中国語
の会話文を語用論の観点から分析した。
具体的には中国の映画から会話文のデー
ターを抜き出し考察を行った。第1章で
は、これまでの先行研究から、語用論の
定義について述べ、第2章では、3つの
映画作品について、それぞれの年代、時代
背景、登場人物、立場や位置づけ、あら
すじを述べ、主にグライスの協調の原理
に照らし合わせ、分析した。時代も背景
も全く異なる作品の中に現れる、語用論
的会話文の特徴を述べている。第3章で
は、会話文の分析を基に、作品ごとにど
のような会話的特徴が見られるか、また
語用論的表現が作品の中でどのように作
用しているのか考察した。会話背景、話
者の意図、各関係者の立場や位置付け、
また時代背景が違えども、言語学上、必
要とされる情報のやり取りは、重要な場
面では協調の原理に則った発話を行う事

が多い。シリアスな場面では相手の面子を保つ為に婉曲な表現を使用しているケースがある。また恋愛、コメディという場面においては、直接的な表現より比較的婉曲な表現、つまり語用論的発話が多い傾向にあることがわかった。

◆林如 中国語における「了」の焦点提示性について 本論文では、焦点理論の観点から、動詞接辞「了」が焦点を提示する機能を持つことを検証し、「了」が文末の自然焦点と文中の対比焦点の両方を提示する機能も持つことを証明していく。

劉勳寧(一九九九)は、「了」の最後の動詞節に付く中国語Vf規則を提唱した。本論文では、劉(一九九九)の検証から、考察対象の「了」が連動文中の動詞節に付く場合を取り上げて証明する。

第1章では、研究の目的及び本論文における理論の基礎となった劉(一九九九)の研究内容を紹介した。

第2章では、焦点の観点から出発し、中国語動詞接辞「了」の先行研究について考察した。

第3章では、理論の枠組みを紹介した。第4章は先行研究による条件符合法と疑問文検証法についての研究方法を紹介した。

第5章では、「了」の焦点を提示する機能を考察し、筆者が抽出した例文の分析により、対比焦点についてのVfV規則について述べた。

このように、「了」が連動文中の動詞節に付く場合を取り上げ、「了」は文中の対比焦点を提示する機能も持つということが証明できた。

◆魯純 中国近代における人力車夫像 20世紀初頭の中国北京城を走り続けている「人力車夫」は、都市に住んでいる市民、上京したばかりの知識人、北京に來た観光者など、必ず誰かと接触できる存在であった。人力車夫は、技術の必要がなく単純な肉体労働であるがゆえに、他に就くべき職がない人にとつて、最もポピュラーな職業であった。しかしながら、人力車夫の数が次第に増える一方で、この膨大なグループは都市に混乱をもたらし、彼らの非情に苛酷な労働環境

と貧しい生活も、徐々に市民の目に入ってきた。本研究では、社会調査と文学作品に基づき、人力車夫の現実像と文学像を対比、整理し、中国近代における人力車夫の全体像を考察することを目的としている。知識人の見聞や想像により描いた人力車夫の「文学像」と社会調査により明らかとなった人力車夫の「現実像」との間に、いかなる距離があるのである。知識人が社会調査や日常観察を通して描いた人力車夫のすがたには、生計問題に対しての彼らがあつた強烈で長期的な恐怖への理解が欠けている。それも知識人たちが認識していなかった人力車夫像の一つの側面であろう。

〈近況報告〉

◆水津有理 佐藤保先生と三峽の旅 二〇一五年秋、佐藤保先生について長江の旅に行ってきました。同行は研究室の先輩・今井佳子さん。羽田から北京経由で武漢に入り、「黃鶴樓を辞し」たのち、宜昌から大型客船に乗船。途中白帝城などの史蹟で下船観光しながら四泊を船中で過ごし、重慶で下船という旅程。長江

を遡る三峽「上り」です。

ダム建設により景観が様変わりしたといわれる三峽ですが、その一方、大型客船の通行が可能となり、かつての難所も悠々と越えることができるようになりました。残念ながら今回、「兩岸の猿声」を聴くことはできませんでしたが、詩の講義を聴きながら、かつて詩が詠われた場所をめぐるという体験は格別のものでした。

とりわけ心に残っているのは、船中、朝食の席で佐藤先生から教えていただいた「三峽 一線の天、三峽 万繩の泉」(唐・孟郊「峽哀」)の詩句です。切り立った崖の間からわずかに覗く天、岩からしみ出て断崖を伝わり落ちる無数の水。小さな舟で難所を越えた詩人がみた風景は、大型客船の甲板から眺めるそれとはかけはなれたものであったに違いありませんが、残されたことばを通じて、かつて詩人たちがいた時空との連なりを感じるこゝろができたように思えた旅でした。